

である。従つて所謂表層文化の修驗道への働きかけが考へられるばかりでなく、修驗道より表層文化への影響も亦かへりみられねばならないであらう。これを具體的な一例を以て言へば、修驗道の日本文學や藝術に對して有する關係の如きも、残されてゐる一つの課題ではないであらうか。いまこゝに新しい領域の研究に歩を進められた氏か、さらにかやうな方面へも觀點をむけられ、修驗道史研究を大成されんことを祈つてやまないものである。

(A5版・三六〇頁・河出書房・四圓五拾錢(高瀬重雄)

近世支那經濟史研究

小竹文夫著

本書は『經濟史上に於ける近世支那社會の性質』以下六編、何れも主として清朝經濟史に關し、已に定評ある著者の既作・既發表の勞作を一書に纏められしものである。が、各篇の排列に一貫せる有機的關聯性を賦與せしめられたる本書を手にする時、又自ら別個の興趣を催し、著者自らは是等諸論文を骨子として他日を期して居らるゝ「支那經濟史」の構想は、已に其の輪郭、彷彿たるものがある。

即ち、初篇『經濟史上に於ける近世支那社會の性質』は、著者の『近世支那社會の經濟發展段階上に於ける地位』の規定に關する論考であつて、今日、最も普遍的に行はれて居る封建社會説及び特殊社會説の二者に對する批判を展開しつゝ、自らは是を『君主專制的官僚政治の時代なり。』と、規定せらるゝものであり、已に著者累次の著作、講演・座談・討論に反復主張せられて居る所

であるが、巻頭に此の一篇を掲げられしは歴史學が文化科學としての自らの地位を主張する以上、歴史記述に於て精査嚴密なる概念規定の前提せらる可きを憶はれての意圖に基かれしものならんと推察せられる。尤も此の規定は、著者の『現代支那社會論』に對する西田太一郎氏の批評(『東亞人文學報』二卷一號昭十七、三三)にも窺はるゝ如く、今日、未だ必ずしも一般的なる賛同を得ては居らぬ。が、著者の實證的研究の成果として到達せられし歴史理論たる事を憶ふ時、此の論考は高く評價せらる可きであらう。

次篇『明清時代に於ける外國銀の流入』に於ては、明末以降、清道光以前に於ける外國銀の對支流入量を測定、その總額大約三億五千萬弗の多きにのほりし事を概算し、『近世支那社會をして漸次銀貨國たらしめし要因は、加藤繁博士の銀鑄開發説と共に、實に銀の對支流入の齎せるものたりし事。』を説かれ、次で『清代に於ける銀・錢比價の變動』に於ては、名目貨幣たると共に、未だ實質貨幣たる性格を脱却し得ざりし清朝の法貨たる『銀兩』(制錢)間の市場比價の騰落常なき様相を、清朝一代を通じ順を追ふて跡付けられしもので、要約すれば清初より嘉慶末年に至る間、兩者の均衡を得しは乾隆二十八・九及嘉慶元年のそれも極めて短時日であり、其他は苟且も休む間なき騰落を反復しつゝ、道光中葉以降、アヘン輸入の盛行に伴ふ銀の對外流出を契機として錢價の大暴落を將來し、やがて咸豐に入り銀の流入期に再會して稍々小康を得るが、光緒に入り支那が世界市場の一環としての關聯性を深めると共に當時の世界市場の銀價低落銅價昂貴の潮流の中に吸

收せられて行く様を詳述せられ、更に「近世支那租税上に於ける物納と錢納」に於ては、支那史上に於ける納稅物體の變遷を跡付け、近世支那の正賦輸納は兩稅法施行以後に於ては「錢納」を、一條鞭法實施以後に於ては「銀納」を原則とせしにも係らず、文獻上物納的記錄の猶多く散見するを指摘、是等は實は、重農思想に基く保守的表現技巧に過ぎず、文獻的記錄はともかく實際には「錢納」乃至「銀納」が絶對的優位を占めて居た。此事を論述せられしものである。以上三篇を通じ、著者が近世支那の經濟形態を一貫して貨幣（交換）經濟の面より掘下げ、以て其の解明に資せんと意圖して居られる事が察知せられる。

次で『清代の耕地開墾』に於ては、清初の原熟荒地はやがて間もなく開耕しつくされ、爾來少くとも支那本土に於ては、清朝一代を通じ、邊疆地域の開拓・農具及び農耕方法の改良・不毛地乃至零碎空地の利用が反復獎勵せられねばならなかつた程、新たに開耕せらる可き未耕地の極めて少かりし事を、主として奏銷冊の統計を批判利用しつゝ推論せられ、最後に『清代に於ける人口』に於ては、主として『東華錄』の戸口統計に準據し更に個人的研究報告をも廣く參酌して近世就中清代の人口の實相を推定せられしものである。以上二篇の中、前者は主として支那に於ける農田の集約的經營を將來せし要因と看做さる可く、又後者はそれが餘りにも過剰なりしが故に支那社會經濟の發展に或種の制約的影響を齎せるものとして、何れも前三篇と共に直ちに近世支那社會に於ける經濟形態の本質究明への前提的條件たり得るものであらう。

要之、各篇何れも經濟史上に於ける本質的な問題を提示して是が解明を進めつゝ、近世支那經濟史の全般に遍る關聯性を包含せしめ、行間また極めて示唆に富み、爲めに或は聯想、恣睢自用に流れしやを懼れるものである。ともあれ支那近世經濟史の研究は今や單に東洋史學界のみに止らず我邦の直面しつゝある歴史的现实の面よりも強く要請せらるゝ所である。が、此の要請は未だ殆ど満足せしめられては居ない。此の責の一斑は勿論あまりにもアカデミックに失しつゝあつた専門史家の負ふ所でもあらうが、又一面なら根本資料に準據する事無く、他人の勞作の二次的引用に加ふるに借用歴史理論の公式的適用を以て事足れりとなせる一部社會經濟學徒の負ふ可き所でもあつたらう。然るに本書に於て斯る兩者の缺陷は正に揚棄せられんとし、遂に現下の要請を満足せしめ得るが如き解答への輝しき道標の一つが打ち建てられたかの感を深くする。幸に著者の豊かなる現地的認識と該博なる讀書的知識と一層の理論的切磋とを以て是等讀論文に更に豐饒味味なる肥肉を附加せられたる「近世支那經濟史」の上梓の一日も速かならん事を大なる期待を以て待望するものである。（昭十七、十・弘文堂發行・三二〇）（眞島行雄）

支那佛教史研究 北魏篇 塚本善隆著

本書は支那佛教史の權威として夙に令名高き著者が、昭和十二年以降において、東方學報、支那佛教史學、等の各誌に發表された、主として北魏の佛教に關する九篇と未發表の一篇の論文を排